

中国のほんの話(84)

横光利一『北京と巴里』

蔭山達弥



今から94年前、中国・上海で五・三〇事件が起った。この事件は日本人の経営する工場で中国人労働者が待遇改善を求め、ストライキを起こしたことに端を発したもので、5月30日には、学生・労働者のデモに対しイギリス警衛隊が発砲、群衆十数名が死亡、その後全国的な反帝国主義の革命運動となった。

横光利一は事件発生から三年後、1928年4月、上海に出かけた。横光に上海を見て来いと言ったのは芥川龍之介である。「(芥川)氏は亡くなられた年、君は上海を見ておかなければならないと云われたのでその翌年上海に渡ってみた。」(『静安寺の碑文』)横光は中学時代の旧友を訪ねて、約一ヶ月の間、西洋と東洋の対立が最も先鋭に表れた都市・上海に滞在、五・三〇事件をテーマに小説を書いた。『上海』序で横光は「私はこの作を書こうとした動機は優れた芸術品を書きたいと思ったというよりも、むしろ自分の住む惨めな東洋を一度知ってみたいと思う子供っぽい気持ちから筆をとった。」と、述べている。

小説は雑誌『改造』に断続的に発表され、1932年に単行本『上海』として刊行された。『上海』は1925年、中国・上海で起きた反日民族運動を歴史的背景にして、上海に住み、浮遊し彷徨する一人の日本人の苦悩を描いた小説である。

『上海』執筆から八年後、1936年3月下旬、横光は新聞社の特派員としてパリに到着。パリを拠点に欧州各地を旅行、8月にはベルリンオリンピックを観戦、同月25日にシベリア経由で帰国した。そして1938年11月、横光は中国華北、華中を訪れ、念願だった北京を訪れる。

「十年ほど前から北京へ一度行きたいと思っていたが、その暇がなかった。北京へ行くには、満州から行っては駄目だという説がある、どうしても上海から北上しなくては誤りだという玄人筋の意見である。私も結果が偶然その説のままになったが、現代から過去へのぼる意味合いでは、よくこの説は分かったと思う。」(『支那海』)

横光は訪れたパリを思い浮かべ、北京を思

い、次のように述べている。「…支那の中でも北京は他のいかなる都市よりも安眠に適している。この都会は死体と同様分析不可能な場所であり、たとえ分析したところでそれは死をするに等しい無意味である。北京の美しさの意義はこうしてわれわれの前に死のごとく現れたのだ。それは全くパリの老齡の静けさとは違っている。」

横光は北京の美しさについて、唯一無二の美しさだと言う。「…北京へ行くものは悪徳と戦うつもりで行かない限り、身につけた現世の健康なものはずべて無くなってしまいかもしれぬ。ここには精神のある美よりも詐術の美を美とする精神がある。もし疲労と孤独のために難なくこれに襲われたら、恐らく北京ほど美しく見える都会はないだろう。死体に色づけ客間に置き放したまま嫣然と笑わせたようなこの都会の女性的な壮麗さは、たしかにどこの国にも類例はあるまい。」

北京の冬の訪れは早い。晩秋の冴え渡った夜空に浮かぶ大きな月に横光は驚嘆する。「私はこの月ほど驚くべき大きな月を見たことはない。前から西洋の婦人は北京の秋の月を見ると狂人になるものが多いと聞いていたが、なるほどこの月の大きさは月というべきものではない。虚空に現れるものが絶えずこのように大きくて赤ければ、人間の精神は現実から放れてしまう。支那の優れた人間の分析力が天文に集ったことも、一つは思いが我を放れて空へと集った結果であろう。或いは支那人の精神の原点はこの月に潜んでいるのかもしれない。」(以上『北京と巴里』)

かげやま たつや (非常勤講師・中国文学)